博士学位申請論文審査報告要旨

2022 年 2 月 1 日

申請者　青木耕平 (ld131001)
論文題名　「ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題―1990 年代アメリカ文学/グローバル・ポピュラー・カルチャーの一傾向」
審査委員　井上間従文
　　越智博美　（専修大学）
　　藤井光　（東京大学）

１．本論文の内容と構成

本博士論文は、1989 年までの冷戦期に名声を確立した複数のアメリカ小説家たちが 1990 年代に執筆した小説作品が、一つの作品内で同時代の社会的変容や言説的問題への回答を十分に提示することができずにその作品を三部作以上の大作へと「建て増し」し、あるいは「分裂」させたことの文学史的意味とテクスト的特徴の双方に光をあてるものである。ソ連崩壊後に湾岸戦争を経たアメリカにおける 1990 年代とは、資本主義と帝国主義への批判が急速に後退すると同時に、国家がマイノリティの同一性を承認するかたちで政治的不満をある程度回収する 10 年間であったといえる。こうした社会的コンテキストの中で、本論文は「建て増し」あるいは「分裂」を経た個々の小説が階級、ジェンダー、レイスなどの表象諸カテゴリーの批判的再検討を通して新たな集合性や関係性を表現において暗示していることを指摘している。

本論文は以下のように構成され、序章では方法論が明確化され、続く各章では特定の作家論、作品論というかたちで 1990 年代アメリカの社会的コンテクストと小説テクストとの緊張関係がさらに詳細に論じられている。

序章：ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題
第一章：キルゴア・トラウトの三度の埋葬：カート・ヴォネガット『タイムクエイク』と、「歴史の終わり？」論争
第二章：第六巻の深淵：アーシュラ・K・ル＝グウィン＜アースシー＞第二の三部作と 1990s ジェンダー論争
第三章：ビリーはメキシコに行った：コーマック・マッカーシー＜国境三部作＞と北米自由貿易協定
第四章：トニ・モリスンの戦争：ビラヴド三部作梗概ノートを読む
第五章：もう一つの 1995 年：村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』三部作と歴史修正

主義
終章：＜帝国＞の出現と挫折

２．本論文の概要

まず序章では本論全体をとおした問題提起が整理され、その問題意識の源である個々の作家および小説群の文脈化が行われる。まず本論文の問題提起は、カート・ヴォネガット（SF 小説）、アーシュラ・ル＝グウィン（ファンタジー小説）、コーマック・マッカーシー（カウボーイ小説）、トニ・モリスン（奴隷制の記憶をめぐる小説）という、戦間期に生まれすでに評価を確定させた小説家たちが、1990 年代になるとジャンルと題材を異にしながらもそれぞれ特異な形態の長編小説群を著した、という事実に基づいている。本論文はこの事実を、恒常化する戦争と新自由主義という新たな問題が顕在化したポスト冷戦期アメリカ社会にて、長編小説作家たちが社会と文学との亀裂含みの関係性と真摯に向き合った際のある一つの傾向であるとする。本論文はこの傾向性を、諸小説家が 1990 年代アメリカにて表面化した社会的諸問題を把握し、批判的視座を得るために必要なフィクションの方法論探求を 1990 年代全般を通して行うが故に、一つの小説はその未完性を内包しながら、続編が前編で残された問いを深化させて行く際のある種のサイクルであると論ずる。

第一章ではカート・ヴォネガットが 1997 年に刊行した SF 小説『タイムクエイク』が、1996 年にはすでに完成していた『タイムクエイク』草稿が不完全であると自己言及的に宣言しつつ、この草稿に加筆を行い、それをさらに断片化させる試みの意義を問う奇妙な小説として刊行したことに着目する。「時震」（timequake）と呼ばれる断絶がテクストに幾度も訪れるこの小説を本論文は、フランシス・フクヤマの著作『歴史の終わりと最後の人間』（1992 年刊行）に代表される西側資本主義陣営礼賛としての発展史的時間理解への抵抗として読解し、また『タイムクエイク』以後のヴォネガットのエッセイにも主人公キルゴア・トラウトが架空の人物として何度も再来し、資本主義言説が隠蔽する社会と人間の異なるあり方を幾度も問うたことの意義を前景化させる。

第二章ではアールシュラ･K･ル＝グウィン＜アースシー＞シリーズの初期三部作に続く、第二の三部作が論じられている。本論文は、ル＝グウィンが男性の魔法使いゲドを中心とする三部作として 1974 年にいちど完結させた＜アースシー＞シリーズを、1990 年の小説『テハヌー― アースシー最後の書』、1998 年の短編「ドラゴンフライ」、さらに 2001 年に短編集『アースシーの物語』、長編小説『もう一つの風』という「建て増し」を経て継続させた際に、1970-80 年代のアメリカ・フェミニズムの言説内容と大きく呼応する女性主人公たちを描写しはじめたことを検討する。短編「ドラゴンフライ」の女性主人公ドラゴンフライは魔女から告げられた自らの本当の名「アイリアン」をも拒絶するという言語遂行的発話（「わたしはアイリアンであるだけではない！」を行い、男装をすることで知的権威の空間に撹乱をもたらし、最後には竜となって物語空間から姿を消す。本論文は同時期に刊行されたジュディス・バトラーの理論書 *Gender Trouble*(1990)と *Bodies That Matter*(1993)におけるジェン

ダー化を強いる図式は身体として物質化するという議論を、ル＝グウィンのテクストにおけるジェンダー図式変容の場としての＜アースシー＞描写へと接続し、そこで現れる女性/竜のイメージがジェンダー化された生産諸関係にて「存在不可能」とされる身体の登場であることを分析している。

第三章はコーマック・マッカーシーの「国境三部作」と呼ばれる小説群を検討している。マッカーシーは、1984 年には最終稿がすでに存在した小説『平原の町』の前時代を『すべての美しい馬』(1992 年)と『越境』(1994 年)という 2 つの小説で描いた上で『平原の町』(1998 年)を出版し三部作を完結させた。『すべての美しい馬』では主人公のジョン・グレイディが 1940 年代末のテキサスの砂漠において核実験と冷戦の時代を予感し、『越境』では 1950 年の視点から主人公ビリー・パーハムのメキシコへの容易な移動と、メキシコ労働者たちのアメリカへの移住の困難さが対比されることで、1994 年に発効した NAFTA（北米自由貿易協定）がメキシコの農業を破壊し、人々に移住を強いた過程が予感されていると本論文は論じている。さらに本論文は『平原の町』の「エピローグ」では物語世界を 2002 年へと移し、前作の主人公パーハムがグレイディや移住労働者のイメージである「狼」たちの埋葬者でもあることに着目し、アメリカ西部の白人男性的ヒーローとして描かれた身体が、複数の他者たちを「抱く」存在へと変容する萌芽が現れていると指摘する。本論文はマッカーシーの三部作が 1990 年代の視点から 1950 年前後の米墨国境での暴力の痕跡を再検討することで、新しい集合性のあり方を 2000 年代という未来に可能性として手渡していると論じている。

第四章ではトニ・モリスンが、マッカーシーの試みとは正反対に、当初＜ビラヴド三部作＞となるはずだった小説群を『ビラヴド』(1987)、『ジャズ』(1992)、『パラダイス』(1997)という 3 つの異なる小説作品に分割し執筆することで、奴隷制の記憶を後世に伝達するという作家の問題系に生じた変遷を、プリンストン大学モリスン・アーカイブでの調査結果の解読をもとに検討している。本論文は逃亡奴隷の母親がスレイブハンターから守るために赤子の娘を殺害したことと、娘の幽霊が回帰し、愛されることを求める『ビラヴド』での主題が、『ジャズ』末尾での謎めいた語り手から読者になされる禁じられた愛の記憶を「リメーク」してほしいという呼びかけ、さら『パラダイス』では純粋な黒人性を欠くとされる“white girl”を発見し、殺害することで維持される規範的黒人男性性への批判的視座へと分裂していったことをモリソンの三部作構想と実際の小説テクストとの比較読解を通して指摘している。本論文はモリソンがこの分裂をとおして、批評家アラン・ブルームらによる古典的「西洋」文学カノン擁護論と、アフリカ系アメリカ人男性作家に見られるブラック・マスキュリニティ擁護双方への同時代的介入を行っていたことを示唆する。

第五章では、村上春樹が 1990 年代初頭に二年半プリンストン大学に滞在する中で執筆された『ねじまき鳥クロニクル』の第一部と第二部が、その後、第三部という「建て増し」を経てもなお、満州国を含む帝国日本の戦争の記憶を語り、その語りの過程で失踪した妻を「取り戻す」ことに成功していないことの積極的意味合いを検討する。本論文は村上がアメ

リカ滞在時に経験した湾岸戦争への米国内での翼賛的支持と、この戦争に武力参加しなかった日本へのバッシングを受けて「デタッチメント」から「コミットメント」の作家へと転換したという自己評価を括弧にいれることで、村上が公的に表明している「社会的責任を引き受け」る「国民的作家」という自己表象がしかし、『ねじまき鳥クロニクル』第三部の完結をもってしても達成されていないことを作品読解を中心に指摘する。村上本人が述べる「コミットメント」言説がアメリカから日本への回帰物語としてナショナルな主体構築に共犯的である傍らで、村上が書く小説群が記憶を「取り戻す」ナショナルな主体としての日本を最終的に措定するに至らなかったことの積極性を本論文は前景化する。

最終章では＜帝国＞三部作とよばれるアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの理論書『帝国』、『マルチチュード』、『コモンウェルス』の読解を通して、本論文がここまでで論じた小説テクストが示した「建て増し」と「分裂」の特異性を今いちど整理している。一作目『帝国』は、生かす権力主体としての国民国家を地球上に配分し、接合させる新たなネットワーク型の主権権力としての「帝国」が 20 世紀アメリカとその外をモチーフとして描かれたが、ネグリとハートはこうした権力のグローバル化を介した資本経済拡大に抵抗する幅広い社会運動のつながりとしての「コモン」（共同性、共有材、共通感覚）のイメージを 1999 年シアトルでの WTO 閣僚会議に反対するいわゆる「シアトルの戦い」に求めた。本論文はこうした新たな集合性のイメージが 1990 年代の想像力のリミットにおいて浮上していると指摘する。ここで本論文はネグリとハートが提示する「マルチチュード」という多様性に基づく集合性のイメージが、ヴォネガットにおける発展史的経済言説の中断、ル＝グウィンがジェンダー図式を変容させることで顕在化するという「力のない、私の人々」の存在、マッカーシーにおいて国境という線引きに抵抗しつつ浮上する「あなた」と「わたし」の抱擁、モリソンにおける西洋中心主義とブラック・マスキュリニティ言説の双方に介入することで継続される愛の反復などの多様な集合性への模索の可能性を引き継いでいることを示唆する。

本論文の成果と課題

本論文の成果としてはまずなによりもその問題設定の独自性があげられる。1960 代後半に社会運動・学生運動が提示したラディカルな社会変革の地平が徐々にアイデンティティの政治学を介する国家による改良主義と、右派からのバックラッシュの台頭へと切り詰められていく 1980 年代を経た 1990 年代アメリカの社会的コンテクストの中で、一連の作家による小説テクストが連作という「建て増し」あるいは「分裂」を通して、一作品内での問題解決を回避し、長年をかけて問題提起の方法論そのものを先鋭化させいる、という筆者の着想とそれに基づく読解はオリジナリティにあふれるものである。本論文は既にある問題意識と新しい作品に応用するのではなく、新たな問題設定そのものを生み出し、それを説得力あるかたちで提示することに成功している。また、自らの時代（とそれに先行する時代）に対して抱える解消しえぬ違和感を、作家たちが表現上の問題意識として長年かけ

て研ぎ澄ませていった過程をテキスト読解から前景化する作業は、現在の視点からこそ成し得る批判的文学史の営為と言えるし、またしたがってその現在性、アクチュアリティ、現在を批判する力強さを示していると言える。

また 1990 年代アメリカ小説における「建て増し」と「分裂」という傾向および徴候をテクストの徴候的読解として行うという筆者の方法論は、アメリカ各地に点在する作家たちのアーカイブ（インディアナ大学カート・ヴォネガット・マニュスクリプト、テキサス州立大学コーマック・マッカーシー・ペーパーズ、プリンストン大学モリスン・アーカイブ）での綿密な資料調査にも支えられている。本論文はこうした資料的価値が高いアーカイブ・テクストを収集しただけでなく、筆者がさらに丁寧な読解を行った点で評価できる。この調査と読解を通じて、マッカーシーが作を重ねるごとに過去の痕跡を集積することで、未来への地図作成法をより明確にしたこと、モリソンが「受け渡すものではない」と言明する記憶を、実は後続の『ジャズ』と『パラダイス』にまさに「受け渡していた」点などが明らかになった。粘り強い調査に支えられた本論文はしたがって、個々のアメリカ小説作家の作家論としても独自の可能性を秘めていると言える。

また 1990 年代を先進国アメリカ合衆国でも新自由主義が本格化する時代として見て取りながらも、経済基盤主義的な問題設定から批判的な距離を取ることで、ジェンダーとレイスが階級化という効果の形態そのものでもある点に繊細な視点を向けようとしている。ル＝グウィン、モリソン、村上の読解におけるジェンダー図式批判、マッカーシーにおけるボーダー化に抗する親密性への視点などはその良い例である。

こうした学術的成果を示す本論文であるが、いくつかの問題点も指摘せねばならない。第一に小説が小説群として「建て増し」され、「分裂」する際に、個々の作家の方法論が直接あるいは暗に作品内で自己言及的に精査される様態を読み解くためには、作品がテクストという言葉の織物としてこうした批判および自己批判を行っていることにより意識的であるべきだろう。ある問題意識が反復され、深化され、未完のままに留め置かれる際のイメージ、リズム、作品の構成等のテクスチュアルな側面にこだわった分析が本論文ではやや不足しており、論文全体の野心的な射程をまだ十分に捉えきれていない読解が時折みられた。

第二の問題点としては、1990 年代アメリカの支配的言説を新自由主義という経済的言説のみに求めることなく、特にジェンダーとレイスといった諸カテゴリーにおける重層決定的な状況をも視野にいれた本論文であるが、しかしその歴史・言説記述においてやや平坦な面が時折見られた。本論文では著名政治家の発言などが支配的言説(dominant discourse)の事例として引用される傾向が強いため、それぞれの時代と瞬間に実は偏在する勃興的(emergent)な力や形態の徴候的な出現への目配せがやや不足している。1990 年代アメリカの言説的枠組みをそれ以前とそれ以後も含めてより詳細に追跡することで、作品そのものが提示する勃興的な知的枠組みとの相互関係のさらなる理解が可能になるであろう。

だがこうしたいくつかの問題点は本論文全体の達成点と比べると大きなものではなく、今後のための課題といえるものにすぎない。また口頭審査においての各審査委員からのこうした指摘は青木氏自身も認識しているところであり、青木氏のこれからの研究の糧となるものであるといえる。

４．結論

以上から本論文が博士学位論文として優れたものであることを認め、青木耕平氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果報告

２０２２年1月３１日

受験者　青木耕平 (ld131001)
論文審査委員　井上間従文
　　越智博美　（専修大学）
　　藤井光　（東京大学）

２０２２年１月３１日、青木耕平氏の学位請求論文　「ポスト冷戦期における小説の「建て増し」と「分裂」の問題―1990 年代アメリカ文学/グローバル・ポピュラー・カルチャーの一傾向」について本学学位規則に定められているところの最終試験を実施した。試験においては同論文に関する疑問点について逐一説明を求め、また関連分野に関する説明も求めたが青木氏はこれらのいずれにも明確かつ適切な説明と回答を行った。

したがって審査委員一同は青木耕平氏が学位を授与されるに必要な研究業績と学力を有すると認定し、最終試験において合格と判断した。